（1 月 30 日）「使徒言行録 7：9～16」

二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分の身の上を明かし、ファラオもヨセフの一族のことを知りました。

（使徒言行録 7 章 13 節）

・「10 分でわかる旧約物語」という本を書かなければならないとしたら、この「ステファノの説教」をベースにしたらいいなぁと思ってしまいます。ステファノはアブラハムに続いて、ヨセフの話を始めました。
・ヤコブの息子ヨセフは兄たちの妬みによってエジプトに売られましたが、その結果、父ヤコブや兄弟たちが飢饉から救われるということになります。これらの出来事の背景に、人々は神さまの導きとお守りを感じていたのでしょう。
・ステファノがこのようによどみなく語れるのは、ユダヤの人々がいつもこれらの物語を聞かされ、覚えていたからです。それほど彼らにとって、アブラハムから続く物語は大切なものなのです。

（1 月 31 日）「使徒言行録 7：17～22」

そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。

（使徒言行録 7 章 22 節）

・「神がアブラハムになさった約束の実現する時」というのは、出エジプトのことです。奴隷状態になったイスラエルの人々がエジプトから脱出するこの物語は、イスラエルの人たちが一番大事にしていたものでしょう。
・ステファノはまず、モーセの出生について語ります。イスラエルの人々が増え続けることに危機感を覚えたエジプトの王ファラオは、新しく生まれる乳飲み子を殺すように命じました。
・モーセはそのときに生まれたのですが、殺さずに葦のカゴに入れてナイル川に流した結果、ファラオの王女が見つけ、自分の子として育てます。それらのことは、すべて神さまのご計画だったと、ステファノもイスラエルの人々も考えていました。

2024 年 1 月

使徒言行録　　通　読

1 月

（1 月　1 日）「使徒言行録 1：1～5」

イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。

（使徒言行録 1 章 3 節）

・今年は使徒言行録からガラテヤの信徒への手紙までを少しずつ読んでいきたいと思います。使徒言行録の冒頭には、「テオフィロ様」という呼びかけがあります。彼はルカ福音書 1 章 3 節にも登場した人物です。
・つまりこの使徒言行録は、ルカによる福音書の続編（第二巻）として記されたことが分かります。ただしルカ福音書によると復活日の夕方にイエス様は昇天したことになっていますが、使徒言行録では 40 日間使徒たちと共にいたと書かれています。
・イエス様がどれくらいの期間、どこにいたのかはそれほど重要ではないということでしょう。イエス様が共に食事をし、神の国について話され、聖霊による洗礼を約束されたということだけが大切なのです。

（1 月　2 日）「使徒言行録 1：6～11」
こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。　（使徒言行録 1 章 9 節）

・マタイによる福音書は、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。（マタイ 28：19～20）」という宣教命令で終わります。
・「あなたがたの上に聖霊が降ると～地の果てに至るまで、わたしの証人となる」という今日の箇所の言葉は、使徒言行録における宣教命令だと捉えることが出来ます。この書物の最初にこの命令が書かれている意味は何なのでしょうか。
・それは、この書は使徒たちによる宣教の働きを中心に伝えていくということです。福音書がイエス様の働きを伝えたのに対し、使徒言行録は使徒たちがどのようにして福音を伝えていくのかにスポットを当てるのです。

（1 月　3 日）「使徒言行録 1：12～14」
彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。　（使徒言行録 1 章 14 節）

・当時キリスト教はそのような名前で呼ばれることはなく、ユダヤ教の一派である「ナザレ派」と呼ばれていたようです。従って、ユダヤ教の掟である安息日も彼らはきちんと守っていました。安息日に歩くことができる距離はせいぜい 900m ほどだそうです。
・彼らはエルサレムの家の二階に集まりました。二階というのは、山や荒れ野、神殿と同様に、他の人々と離れて神さまと対峙する場所という意味もあったようです。イエス様の最後の陪餐も「二階の広間（ルカ 22：12）」でおこなわれました。
・人々の中には、イエス様の母マリアもおりました。またイエス様の兄弟も一緒にいたことが分かります。福音書の中では否定的に描かれていた彼らですが、後に「主の兄弟ヤコブ」はエルサレム教会の中心人物になっていきます。

（1 月 28 日）「使徒言行録 6：8～15」
最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。　（使徒言行録 6 章 15 節）

・昨日の箇所で日々の分配を任された七人の内の一人、ステファノのついての記述が始まります。彼は恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間でおこなっていました。
・ステファノは会堂の人などと議論しましたが、知恵と霊とによって語るステファノには歯が立ちませんでした。普通であれば感服し、その教えに傾倒するのでしょうが、議論に負けた人たちはでたらめを言って、人々をそそのかしました。
・その結果、ステファノは逮捕されます。言葉でかなわないから、人々を扇動してこらしめてやれ。わたしたちも同じような思いを持つことがあるのかもしれません。しかしそのときのステファノの顔は、天使の顔のようだったそうです。

（1 月 29 日）「使徒言行録 7：1～8」
そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。
（使徒言行録 7 章 8 節）

・大祭司から尋問されたステファノは、語り始めます。この内容は「ステファノの説教」と呼ばれ、7 章 1 節から 53 節に渡る大変長いものです。使徒でもなかった彼の説教が、これほどまでに大切にされているのです。
・ステファノはまず、アブラハムの話を始めます。アブラハムはイスラエルの民の父で、「信仰の父」とも呼ばれます。ユダヤ人である自分たちが同じように大切にしている歴史から、紐解いていくのです。
・アブラハムは「約束の地」を与えられました。そして割礼による契約を神さまから与えられました。ステファノの説教は、この後どのように展開していくのでしょうか。

（1 月 26 日）「使徒言行録 5：33～42」
それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、
（使徒言行録 5 章 41 節）

・最高法院でペトロと使徒たちが語った内容は、聞く人々に激しい怒りを抱かせました。彼らは使徒たちを殺そうと考えます。ところがファリサイ派のガマリエルという人物が、議員たちにこのように語ります。
・それは、「人から出たものならば自滅するし、神から出たものならば滅ぼすことはできない」ということです。ガマリエルは冷静に対処するように言います。彼は民衆から尊敬されていました。
・ガマリエルの意見に納得した議員たちは、使徒たちを釈放します。ただし釈放の前に鞭で打ったようです。この「辱め」は、使徒たちにとって喜びとなりました。イエス様も十字架の前に鞭打たれましたが、自分たちも同じ苦しみを負ったからなのでしょう。

（1 月 27 日）「使徒言行録 6：1～7」
それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。
（使徒言行録 6 章 3 節）

・すべてのものを分かち合っていた初代教会でも、トラブルは起こっていました。それは日々の分配に不公平が生じているということです。どうやら話す言語によって、グループが形成されていたようです。
・わたしたちの教会の中でも、同じようなことが起こりうるのかもしれません。「すべてを平等に」というのは、極めて難しいことです。しかし彼らは、ステファノを含む七人にその大役を任せます。
・彼らの役割は、聖公会の中の「執事」にあたるものです。彼らの働きによって、弟子の数は増え、祭司も大勢仲間に加わっていったそうです。わたしたちも「執事」の働きを、もう一度見直す必要があるのかもしれません。

（1 月　4 日）「使徒言行録 1：15～20」
兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。
（使徒言行録 1 章 16 節）

・彼らは、120 人程の集まりになっていました。独立したユダヤ教の集まりを形成するのに必要な人数は、120 人（ただし成人男子で）だったそうです。つまり彼らは、法的にも認められた存在になっていたということです。
・ここでペトロは演説をします。使徒言行録には使徒たちの演説が多く見られます。言葉によって、福音が伝えられていくのです。彼は最初の演説の中で、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダについて言及します。
・ペトロはユダの行動について、「～しなければならなかった」と言います。原語のギリシア語では、神さまによる行為を示す言葉が使われています。ユダは神さまが彼に与えられた務めを果たしたのだと、ペトロは語るのです。

（1 月　5 日）「使徒言行録 1：21～26」
二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。
（使徒言行録 1 章 26 節）

・ルカによる福音書および使徒言行録の中では、「使徒」と「弟子」とは明確に分けられています。使徒はイエス様が洗礼を受けたときから天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者でなければなりません。
・しかしルカ福音書によれば、イエス様は洗礼を受けた後に四人の漁師を弟子にしています。その彼らも使徒と呼ばれているのは何故なのだろう？という疑問は生まれます。パウロは正当な使徒ではないということをここではっきりしておきたいということでしょうか。
・さてユダヤ人にとって、12 という数字はイスラエル 12 部族に見られるように大切なものでした。そこで彼らは、11 人に減った使徒の数を 12 に戻すことにします。ただ自分たちで決めるのではなく、最後はくじを引きます。まさに「かみさまのいうとおり」です。

（1 月　6 日）「使徒言行録 2：1～4」
そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。
（使徒言行録 2 章 3 節）

・教会では復活日の 7 週間後に、聖霊降臨日の礼拝をおこないます。そのときに必ず読まれるのが、今日と明日の箇所です。激しい風が吹いて来るような音（ということは実際には風は吹いていない？）が天から起こりました。
・そして「炎のような舌」が使徒たち一人一人の頭の上にとどまりました。この様子は、想像するだけで少し不思議な感じがします。炎は聖霊を現しています。聖霊によって人々に言葉が与えられたということでしょうか。
・使徒たちは、霊が語らせるままにほかの国々の言葉で話しだしました。バベルの塔の物語で言葉がバラバラになったのが、元に戻ったという意味もあるでしょう。またこれから使徒たちが語る福音が、人々の理解できるものになっていくということも示しているようです。

（1 月　7 日）「使徒言行録 2：5～13」
人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。
（使徒言行録 2 章 12 節）

・五旬祭の出来事は、人々に大きな驚きを与えました。神さまは「目に見え、耳で聞くことができる」しるしを使徒たちに与えました。人々が何よりも驚いたのは、ガリラヤの人が自分たちの故郷の言葉で語っていることでした。
・聖書には、そのときエルサレムに集まっていた人がいかに様々な地方から来ていたのか、列記しています。五旬祭のためにエルサレムには、遠くからも多くの巡礼者が来ていたのでしょう。
・このとき使徒たちが語った言葉は、いわゆる「異言」ではなく、それぞれの故郷の言葉として理解できるものでした。ですから、お酒によってろれつが回らない状態ではありません。この驚きの中で、人々はペトロの説教を聞くことになります。

（1 月 24 日）「使徒言行録 5：17～26」
「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」
（使徒言行録 5 章 23 節）

・「出る杭は打たれる」と言います。ペトロたちの行動は、大祭司とその仲間たちに妬みを引き起こさせました。自分たちにはペトロのような癒しの力が与えられていないし、民衆もペトロたちを称賛しているからです。
・その事実を受け入れることが出来ず、彼らは使徒たちを捕らえて牢に入れてしまいます。自分が足りないことを認められずに、自分より優れた人を攻撃してしまう。そのような妬みの心は、わたしたちにもあります。
・神さまは主の天使に命じ、牢の戸を開けて使徒たちを外に連れ出させました。そして「命の言葉」を民衆に語るように伝えます。神さまの言葉は、多少の抵抗などでは遮ることなどできないのです。

（1 月 25 日）「使徒言行録 5：27～32」
ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。
（使徒言行録 5 章 29 節）

・「あの名によって教えてはならない」と、大祭司は使徒たちを尋問します。「あの名」とは、イエス様の名のことです。イエス様がなさったことや、十字架につけられたイエス様を神さまが復活させられたことを、ペトロたちは語り続けました。
・どんなに迫害され、厳しく「語るな」と命じられても、ペトロたちは語るのをやめませんでした。それは「人に従うより、神に従う」ことを、何よりも大切にしていたからなのでしょう。
・わたしたちはどうでしょうか。神さまの愛を語るのに、躊躇することはないでしょうか。もしそれが対面や体裁を気にしてのことであれば、それは「人に従う」ことと変わらないのかもしれません。

（1 月　22 日）「使徒言行録 5：7～11」
教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。
（使徒言行録 5 章 11 節）

・アナニアが倒れて墓に葬られた三時間後、何も知らない妻のサフィラがやってきました。なかなか帰ってこない夫を心配したのでしょうか。自分たちがささげた物が、きっと喜ばれているに違いないと思っていたかもしれません。
・ペトロはサフィラに、足元に置かれたお金が土地を売った代金すべてなのかと聞きます。サフィラは「そうです」と答えました。アナニアと同じように、神さまを欺いたのです。その結果、サフィラも息が絶えることになりました。
・このことを聞き、教会全体は非常に恐れたそうです。それはそうでしょう。なぜペトロは二人の誤りを正し、悔い改めるチャンスを与えなかったのでしょうか。これはイエス様が伝えた神さまの愛と、遠く離れているようにも思えます。

（1 月　23 日）「使徒言行録 5：12～16」
人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせた。ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした。
（使徒言行録 5 章 15 節）

・ペトロたちの行動は、人々の注目を集めていきます。彼らは自分の持ち物を差し出し、それを共有して生活していました。また心を一つにして祈り、多くのしるしや不思議な業をおこなっていきました。
・13 節に出てくる「ほかの者」というのは、彼らに敵対していた人たちのことだと思われます。特にユダヤ人指導者たちからみると、ペトロたちの言動は受け入れることができなかったでしょう。
・しかし民衆は、ペトロたちを称賛します。というのも、彼らは病人や汚れた人を癒やしてくれたからです。具体的なしるしがあると、人の心は動きやすいものです。ついにはペトロの影にさえ、その不思議な力を見出していくのでした。

（1 月　8 日）「使徒言行録 2：14～21」
そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。
（使徒言行録 2 章 16 節）

・聖霊が使徒たちに降ったあと、ペトロは他の 11 人と一緒に立ち上がり、声を張り上げて説教を始めます。福音書のペトロの姿を知るわたしたちにとって、「これは別人か？」と思うほどです。
・わたしたちも神さまによって、変えられていきます。ペトロほど大胆に語ることはないにせよ、誰かに手を差し伸べたり誰かのために祈ったり、聖霊に押し出されて動かされたという経験は、みなさんもあるのではないでしょうか。
・ペトロの言葉の中に、「若者は幻を見、老人は夢を見る」というヨエル書の言葉が出てきます。イエス様の十字架と復活によって、夢や幻が現実のものとなってきたのだ、とペトロは語ります。

（1 月　9 日）「使徒言行録 2：22～28」
しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。
（使徒言行録 2 章 24 節）

・次にペトロは、ダビデの言葉を引用します。これは詩編第 16 編にある言葉で、日本聖公会の祈祷書では、葬送式の告別の祈りのあとに用いられています。
・司式者が「主は命の道をわたしに示される」というと、会衆は「主のみ前には満ち溢れる喜びがあり、主の右には永遠にもろもろの楽しみがある」と応じます。愛する方と地上での別れをするときに、すべてを神さまにお委ねするのです。
・神さまはイエス様を死の苦しみから解放し、復活させられました。それはわたしたちもまた、永遠の滅びとしての死から解放され、神さまの元での魂の憩いにあずかるためです。その喜びを、ペトロは人々に伝えずにはおられなかったのです。

（1 月 10 日）「使徒言行録 2：29～36」
それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。
（使徒言行録 2 章 33 節）

・ヨハネによる福音書 14 章 26 節に、このようにあります。「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」。
・ペトロはこの説教の中で、イエス様が復活されたことを何度も繰り返します。また旧約聖書を引用して、そのことを説明していきます。ペトロは学者ではなく、漁師でした。しかし彼の言葉は、自身に満ちていました。
・ペトロは語る言葉を聖霊によって教えられ、そして聖霊に力づけられて語っていったのでしょう。そこには、イエス様を三度も否認し、十字架の場面から逃げたしたペトロの姿はもう見られません。

（1 月 11 日）「使徒言行録 2：37～42」
ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。
（使徒言行録 2 章 41 節）

・ペトロの説教を聞いて、人々は心打たれました。これは「感動」というよりも、「動揺」というイメージの言葉です。彼らは過去自分たちがしてきたことに対して、そしてこれから先自分たちがどのようにすべきかについて、考えていきます。
・ペトロはそのような彼らに、「悔い改めなさい」と語ります。聖書に出てくる「悔い改め」とは、心を入れ替えて反省するというレベルではなく、神さまに背を向けていた生き方から 180 度向きを変えて神さまに向き直ることです。
・ペトロの言葉を聞き、その日だけで 3000 人の人が洗礼を受けました。10 時間洗礼を与え続けたとしても、12 秒に 1 人洗礼を受けた計算になります。すごい光景が繰り広げられていたことでしょう。

（1 月 20 日）「使徒言行録 4：32～37」
信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。
（使徒言行録 4 章 32 節）

・聖公会では聖餐式の中で、奉献の中で信施（献金）を集めます。その際に司祭は「全能の父なる神よ、この「信施」供え物を受け、主のみ業のために用いてください」と祈ります。
・そして会衆は、「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に献げたのです　アーメン」と応えます。すべてのものは神さまから頂いたものであり、その中の一部をお返しするのだということです。
・初代教会においても、「すべてのものは主の賜物」という考えが大事にされていたのでしょう。そしてその「すべて」に入るのは、財産や土地、お金だけではありません。わたしたち一人ひとりも神さまのものです。その賜物も働きも、みんなで用いていくことが大事なのです。

（1 月 21 日）「使徒言行録 5：1～6」
この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。
（使徒言行録 5 章 5 節）

・アナニアとサフィラの物語は、わたしたちに複雑な感情を抱かせます。アナニアは土地を売りますが、代金の一部は自分のために取っておき、その残りを使徒たちの足元に置きました。そのことは妻のサフィラも相談を受け、知っていました。
・わたしたちの感覚だと、自分の財産の一部を提供しただけでも素晴らしいことのように思います。財産を自分だけのものにして、何もささげなかった人も、きっといたのではないかと思うからです。
・しかしペトロは、アナニアの罪を指摘しました。その罪とは、神さまを欺いたということです。人間の前ではともかく、神さまの前には正しくあるように。それがペトロの思いでした。その言葉を聞いたときに、アナニアの息は絶えました。

（1 月 12 日）「使徒言行録 2：43～47」
すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。
（使徒言行録 2 章 43 節）

・「恐れ」という言葉が、唐突に出てきます。昨今の宗教に対する世間的なイメージと重ね合わせると、彼らは「恐れ」によってマインドコントロールされ、支配されているのではないかと思うかもしれません。
・しかし、その「恐れ」の原因は使徒たちの不思議な業としるしであり、彼らは神さまに対する「畏れ」に似た感情を持ったとも読めます。その結果、人々はすべての物を共有し、必要に応じて財産や持ち物を売って共に分け合いました。
・その生活の基礎にあるのは、昨日の箇所の最後の節(2 章 42 節)にある「交わり」「パン裂き(礼拝)」「祈り」です。彼らは単なる社会福祉団体ではなく、祈りと賛美の共同体として歩んでいったのです。

（1 月 13 日）「使徒言行録 3：1～10」
ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」
（使徒言行録 3 章 6 節）

・ペトロとヨハネはユダヤ教の慣習に倣い、神殿での日に三度の祈りをしていました。このころはまだ「キリスト教」という独自の宗教ではなく、あくまでも「ユダヤ教の一派」という認識だったようです。
・神殿の入り口にある門のところには、施しを乞う人たちが集められます。というのもユダヤの人たちにとって、困っている人に施しを与えることは、祈ることと同様に敬虔な行為だとされていたからです。しかしペトロはそのとき、金や銀は持っていませんでした。
・けれどもペトロにとって、金や銀など必要ありませんでした。なぜならそれよりも素晴らしいものを与えることができることを知っていたからです。わたしたちもたとえこの世の富を持っていなかったとしても、比べ物にならないほど素晴らしい物が与えられているのです。

（1 月 18 日）「使徒言行録 4：13～22」
わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。
（使徒言行録 4 章 20 節）

・取り調べをしていた人々は、堂々としたペトロとヨハネが無学な普通の人であることに驚きました。イエス様がナザレで宣教したときに、「あの人は大工の息子ではないか」と言われた場面を思い出します。
・二人は漁師でした。律法学者やファリサイ派のように、普段から様々なことを学んでいたわけではありませんでした。このような人たちをイエス様が弟子にしたのは、神さまにのみ寄り頼むことが必要だと学ばせるためだったのかもしれません。
・取り調べをしていた人々は驚き、彼らがこれ以上語るのを禁止しようとします。しかし彼らは、語らずにはおられないと答えました。それほどイエス様の出来事は、人に伝えたいものだったのです。わたしたちもそのようになりたいものです。

（1 月 19 日）「使徒言行録 4：23～31」
祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。
（使徒言行録 4 章 31 節）

・ペトロとヨハネは釈放される際、さらなる脅しを受けました。彼らはイエス様の名によって、一切話したり教えたりしないようにと命じられました。そしてそれらのことを、ペトロとヨハネは仲間たちに報告しました。
・それを聞き、仲間たちは心を一つにして神さまに向かって声を上げました。その内容は、「堂々とみ言葉を語れるようにしてください」というものです。「敵を滅ぼしてください」という祈りではありませんでした。
・その祈りは、神さまのみ心に適ったのでしょう。祈りが終わると、彼らがいた場所が揺れ動き、彼らは聖霊に満たされました。「聖霊降臨」の再来です。聖霊降臨は何度でも繰り返されるのです。

（1 月 14 日）「使徒言行録 3：11～16」
あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。（使徒言行録 3 章 15 節）

・「美しい門」でペトロに「歩きなさい」と命じられた生まれつき足の不自由な男の人は、踊りあがって立ちあがり、歩き出しました。そしてそのまま、ペトロとヨハネに付きまとっていたそうです。「付きまとう」と書かれると、ストーカーのようにも感じますが。
・ペトロは、人々が驚いて自分の元に来るのを見て言います。「なぜわたしたちが自分の力で歩かせたような目で見るのか」と。つまりペトロは、この奇跡は自分の力ではなく、イエス様の名によってなされたことだと強調しているのです。
・今日の箇所の後半に、「信仰」という言葉が二度出てきます。わたしたちが何かおこなったとしても、それは信仰によりイエス様がなさったことだということを、わたしたちも意識していけたらと思います。なかなか難しいことですが。

（1 月 15 日）「使徒言行録 3：17～26」
それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。（使徒言行録 3 章 26 節）

・ペトロにとって、ユダヤの宗教指導者たちや民衆は、イエス様を十字架によって殺害した「仇(かたき)」でした。ピラトがイエス様を釈放しようとしたときも、彼らはそれを拒み、「十字架につけろ！」と叫びました。
・しかしペトロはそのことを、「無知のためであった」と言います。イエス様が十字架上で語った「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。（ルカによる福音書 23 章 34 節）」と響き合います。
・神さまがイエス様を遣わし、ペトロたちに聖霊を与えたのは、報復や復讐のためではなく、すべての人が神さまに立ち返るためです。宗教や民族を超えてすべての人がその対象になっているということを、今を生きるわたしたちも覚えておきたいものです。

（1 月 16 日）「使徒言行録 4：1～4」
ペトロとヨハネが民衆に話をしていると、祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々が近づいて来た。（使徒言行録 4 章 1 節）

・サドカイ派は祭司を中心とした裕福な人たちでした。彼らはモーセ五書（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）のみを聖典としていました。そのためダニエル書などに出てくる「死者の復活」などは、認めていませんでした。
・ペトロとヨハネは民衆に、イエス様が死者の中から復活したということを宣べ伝えていました。その教えは、自分たちが信じていることとは異なっていたため、彼らを捕らえ、留置場に入れたのです。
・わたしたちも自分とは違う考えを耳にしたときに、戸惑うことがあります。しかし違うからといって、SNS で批判したりその考えを封じ込めたりするのはどうなのでしょう。ペトロの言葉は押さえつけられていきますが、信じる人はますます増えていきます。

（1 月 17 日）「使徒言行録 4：5～12」
ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。
（使徒言行録 4 章 12 節）

・前日の夕方に留置されたペトロとヨハネは、議員、長老、律法学者たち、大祭司一族の真ん中に立たせられました。そして尋問を受けるのですが、そのときペトロは聖霊に満たされました。
・「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。（ルカによる福音書 12 章 11～12 節）」とイエス様が言われたのを思い出します。
・わたしたちもペトロのように聖霊に満たされ、「ほかのだれによっても、救いは得られません」とイエス様を宣べ伝える者となれるでしょうか。このペトロの堂々とした姿は、福音書の記述からは考えられないものです。